

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第8回 3児を残し戦死した父

たかなか たかこ
高仲 孝子さん 昭和14年生まれ

父が宮内庁に勤めていた私たち家族は、東京都の世田谷で暮らしていて、私と昭和16年11月に生まれた弟はそこで育ちました。弟が生まれた翌月に太平洋戦争が始まり、昭和17年には父が臨時招集されました。

私の3歳の誕生日前日に、父は、現在の成田市新田にある母の実家に母が妊娠していることを伝えて、親戚をはじめとする多くの人々に「バンザイ!」と見送られながら三里塚から出発しました。私は叔父に抱きかかえられながら「さようなら! さようなら!」と手を振っていました。

父がビルマ(現在のミャンマー)へ出征する前に、母方の祖父と叔父、叔母、弟と一緒に、佐倉の連兵場^{れんべいじょう}に面会に行きました。その時、父は懐からパンを出し、半分に分けて私と弟に食べさせてくれたそうです。しかし、それが最後の別れとなりました。

郵便で届いた父の訃報

出征した父から「生まれた子どもと家族の写真を送ってほしい」と便りがありました。牛車で祖父に送られて、叔父、叔母と一緒に三里塚で写真を撮影し、ビルマに送りました。しかし「いくら待っても届かない」とのことで、後に「輸送する船が沈没した」と聞きました。父からののはがきには、家族の健康をいつも心配していると書かれていました。

戦争が激しくなった昭和19年には、竹山の下に掘った防空壕^{こうごう}に、弟を背負って滑り込んだこともありました。外



父に届かなかった写真(前列一番右が高仲さん)

に明かりが漏れないように、家の電球に木綿の風呂敷をかぶせ、ガラス窓には新聞紙を張っていました。

4歳になった私は、片仮名を一生懸命に覚えて、戦地にいる父や叔父につたない手紙を送り始めました。しかし、昭和20年2月26日、公用郵便で父が1月25日に戦病死したとの知らせがありました。「かけとマラリアのため、名誉の戦病死を遂げられました…。三里塚から祖父が馬に乗って、その手紙を持って来た時、突然の母の大きな泣き声にびっくりしました。

昭和20年3月10日の東京大空襲の時は、母の実家から、叔母と一緒に赤く染まる夜空をいつまでも眺めていました。翌日の昼ごろには、新聞紙や本の燃えかすなどが舞い飛んできたとのことでした。

昭和20年8月に戦争が終わり、翌21年4月、私は遠山国民学校三里塚分教場に入學しました。終戦後、農地解放により、御料牧場の土地の多くが払い下げられました。御料牧場に勤めていた祖父は、土地の払い下げを受け、長原の牧草地を開墾し、農業を始めて、私たちを育ててくれました。

戦後80年近く経過しますが、私の頭から戦争の記憶が消えることはありません。今、世界各地では戦争が起こり、テレビで報道されていますが、人の命の大切さを考えなくてはなりません。双方に多くの犠牲者が出ており「戦争をやめて!」と強く訴えたいです。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年3月15日号 No.1527



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は3月6日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

3月は卒業式の時期ですね。卒業式といえば、卒業生が先生や保護者、在校生に感謝の言葉を、在校生が卒業生にお祝いの言葉を贈る「呼び掛け」が思い出されます。これは昭和30年、群馬県の小学校に勤めていた校長先生の「一人一人が作り上げる卒業式にしてほしい」という思いから始まったそうです。この思いが全国に広まり、今も引き継がれていると考ええると感慨深いですね。卒業を迎える皆さん、「卒業おめでとうございます」。

リサイクル適性[㊞]
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。